武道四百家

九

へ13
3370
24

へ13
3370
24

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

松見朝舞[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

余穢榮
十年八月廿九
本大學圖書部

世人、家毎に[illegible]今
[illegible]人間もいと暑き
[illegible]一木暑りし之若
く山邦の諸の海[illegible]
[illegible]海に捨て東のこうふ
年は四十まりとうの
[illegible]の丈夫人宮寺
[illegible]男[illegible]
[illegible]の一世の
[illegible]暑きとしのゆくて涼

[illegible]
[illegible]
[illegible]

いたるハ二月朱こうハ
御今日出
授ハ四月まき三月
元服ハ何も
りやや某ハ
家ハ
乃遠
抑ハ京都の
月ハ
新年ハ
天皇
丁ハ
月
宮
上方より
出
ハ月の
弥
事
も
ハ
太刀ハ
御
ハ
たる
事も
高
加茂の
祭
見
新
有
事
有
屋
の
御
事
ハ
一
月
ハ
通
年
なる
ども
の
月
月
の
年
の
先
祖
の
者ども

[illegible]げ小弾弦を引き
先輩のもとに行きたり年老
[illegible]も[illegible]し日暮れ疲れ
弾げるの音[illegible]
通りかかりて[illegible]
四方清[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の弾弦[illegible]
[illegible]
[illegible]

城跡より寄せ来る海をとゝ
ゝ遠巻にまもる様にたり海
が折り強弩を云々何分中張籠を
りすりかゝりしかり手負人を
きゝぬゝ長ゝ長ゝ長ゝの強弩
二三度中ゝ引て云ふ事
縄のごとく投ぬ引れば新集の
人々大ひに驚き見ハ雲霞防
敵の防禦方ゝ
と雨を降るしたる様にて
中りし洛中の方
通人通家
上籠中も大力者の人
せ〳〵洛の門日今少
強弩実に所詮の
も新〳〵通清度
門内を取

[illegible]

[illegible]

[illegible]

拍子すあんの出るらんの如く小舞
やうたたり忘れ落も舞ぶ出るとと
はくこうこうと歩りたれば大和ぶ入たり
基房卿思ふる近衛の殿の御前にて
角力ふるもおかしくもけれ敷とも
ちくばくまで揃たりとも清かしき
我れば差りき事りけり小舞もそのあ
りかるる近衛大殿を立ぶ
通りたり以前年の十六も差りたる仕
うてはりれども年らひ思ふ
年演者たるものの通りたりし演りたる
言葉ふ舞ふ面ぶ半分上方別の出る
の所風ぶ入たりを絵の出る花ハ何
ゆや近く拍子も出ぶ
中ぶ言葉れば拍子ハ儀式百寺
の書所同ぶ荒地地ぶ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

と聞くに文隆の御子なる由聞くにも如何
なりて云ふ所の御名乗り
しかるべきもの中間（切れ）
なるべきにかの御方大坂に
年をしのぶに和もう今者
御あり給ふ事をうしば
者の如くいかの事も
ば恋不思議の事なり
ば恋ひ合ふらんげうをとりて三重
も形ばかり実の御子の沖なりけ
年の紙ども色々の年は
小袖一重は紙中の人々と矢
吟ずしてやし立ぎりけ
中にも西方の紙帯と見て
陰さきに強絶りて扶乃出先祖の奴
りて何はいさこ物しい引出

まぢかふりてまやに死たるものとて
有龍神八幡宮ふるき所に長谷の間
ゆるぶ元八幡宮の惡魔世事の
きえ人と見たりのりしかまつの
事なり出船の人くに出船河りとも
海へおこりかりたる人の
正月ののりめりを見たる人の
命をうしなはるあたる三人合の大勢と
助け大勢の人のたのもしかりしかば事
ふ帰りなり事ふ見
べきやうもなしけれ共船の人
ものなりしかども事の人
ふ正月の事を海へ投入れ
ふ船ふ浪ふたぐ流れ行船
も見ものをふ見ればかなるまもふ
ぢたりしかば船ふ

出家のごとくなり大勢の為正覚院の
僧しとなりの御[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]りたる年報の教授
と出めしる理志者が派ひし矢の
相りたるバ年の親命一寸びき
見たるバ見ものの絵ろ寄和をこ
さい紙の巻を矢射ゑさ日ハ寒気
りし利とり根年小三人出
と海もみりて四方あむすびかり
り始とさきゝ猪わかけゝ彩の猪さんあ

たゝり一りゝ海の面をきりり見ゝ大事ハ
ゝいゝ海岸の面のゝ岸ゝ弟九何ゝ
四ぎゝ命をとゝすまいたゞ唯雄を
ゝとゝ力ゝ命をゝ寺八
武士の方の中をすゝ今日今月今
我命をゝ毛もの九龍生の間
器りゝなの方の女ゝ毛ゝのゝゝ
ゝゝ海ゝ龍入ゝ寺市付の取り

世に我が力をもくらべ我命を命とする
事なれば命をとる二子ありて勿論
むべし然して命を深く思ひ第八
仏像の図の産土に性名八幡宮原
の宗後にいつかりて名家の海を
わたくしにて自身の法八幡
乃祖父母を殺せもやはり
と思ひ出でて悔しく海へ
り寄せ海へ限りて海底より
なの丈二十四五尺ばかりの鯨
紅の香を放ちめかしく高波を同じ春
しとなる鯨の服を受け命中南
無三宝貴仏ら天の力を深の力を形
急いで海の底へ
鯨の眼
今海へ我が心

遥に上り水ゆるやかにして立
て海中ハ一面に紅色なるが
ごとくにて実に美しき事筆
もつくしがたし
しかるに角さきの沖ハ
の沖より立り帆あり
又ハ屏風を立たるやうにあた
りしかも同じ様に見
命ハ百畳敷なりあ
船一面にうごくこと
たかハ弓張月の如
海中の赤かりしハ彼矢ハ射
なりしと毎日の人々ハ毎日
上ゆくと大ひくとの
きゝ合命ゆゑ
大神宮御加護なり
たり物語ハ月よりも

一しるのみより能和ハ能ハ能ハ能

貴書拝見致し